五月
百五十号

文系天文学　－星の和名・春－

渡辺　知史

すばる、ひこぼし、あかぼし（明星）、ゆうつづ（夕星）、よばいぼし（婚い星）
例えば、これらの名は昔古文の授業で出てきました。ところが、使うべきときにはあまり働かない私の頭は、これらの名詞が憶える必然性を失ってガラクタになるまで憶えることが出来ませんでした。（全く、ガラクタならいくらでも入るのに、なぜ必要なものは入らないのでしょうか。）もっとも、この類のガラクタは非常に楽しいものばかりで、最近ではすっかり気に入ってしまい、数冊の本を手元に置いて楽しんでいます。そこで、その本の中からいくつかの星の和名を紹介して行くことにします。また、この文の最後に参考にした書籍名を記しておきますので、興味のある方は図書館なり、本屋なりを探してみられると良いでしょう。

（一）　小熊座

北極星は北斗と共に星の名としては珍しく洋名では余り呼ばれませが、残念なことにどちらの名も和名ではなく漢名です。そこで、まずこの星の和名について記して行きます。

北極星と北斗は、どちらも良く目立つ星であるので驚くほど多くの名がありました。特に広く分布している呼称では、

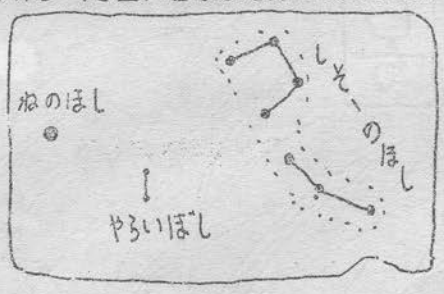
ヒトツボシ（一つ星）、ネノホシ（子の星）、メアテボシ（目当て星）

等があります。
一つ星の名は、北が十二支の第一位であるために以前は北方を一つと呼んだことに由来しているもので、この名の頭に「キタ」を冠して「北の一つ星」と呼んでいる地方もあります。又、子の星もこれと同様十二支で言う「北」つまり「子」からきたもので、これらの他にもホクセイ（北星）、キタノホシ、キタノホシサマ等北が冠されているものは実に多くあります。これに対して目当て星の名は言うまでもなく方角の目標となる星であるからで、この呼称の他にもメジルシボシ、ホウガクボシ等と呼ぶ地方もあるようです。
また、この星が動かないことから

フドーボシ（不動星）、オヤボシ（親星）、スワイドン（すわり星）

等と呼ばれたり、この星を空の巡る心棒とみてシンボシ（心星）と呼ぶ地方もあります。

α星の他では、β星とγ星の２星をバンノホシ（番の星）やヤライボシ（遣らい星）と呼び、この星はシソーノホシ（四三の星：北斗七星）が子の星を食おうとするのを防いでいる、という話が数カ所に残っています。又、同じ様な明るさの星が丁度良い間隔で二つ並んでいるために、これを二つの目とみてカニメ（蟹目）と呼ぶ地方、その



数からニノホシ（二の星）、ニボシ（二星）と呼ぶ地方、そして北極星を一の星、β星を二の星、γ星を三の星と呼ぶ地方もあります。

尚、小熊座の星の並びは丁度北斗を小さくしたような形をしているので、これをヒチヨウ（七曜：北斗七星）に対してコシチヨウ（小七曜）と呼ぶところもあります。

（二）　大熊座

北斗の名は中国のものですが、この七星を一つの星の並びとみる見方はごく自然であり、日本においても実に多彩な呼称があります。

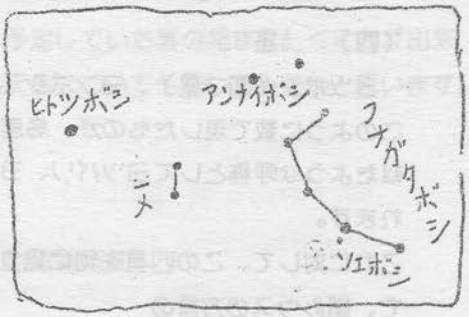
ヒシャクボシ（柄杓星）の名は青森から熊本まで広く分布している呼び名であり、同様の意味で、

ヒヤグボシ（柄杓星）、シャクボシ（杓星）、シャクシボシ（杓子星）

ヒシャクノエボシ（柄杓の柄星）

等の呼称が各地に散らばっています。

これらの名はいうまでもなく漢名と同じ意味のものですが、他にもこの星の並びを物に例えた名が結構あります。例えば、船の梶の形にみてカジボシ（梶星）と呼ぶ地方（特に南斗に対して北の梶星と呼ぶ地方もあります）、土蔵の鍵の形に見なして言うクラカギ（蔵鍵）、面白いところでは、シャモジボシ、ハリサシボシ（針さし星）、又柄杓星と似たような意味でサカマスボシ（酒枡星）。



この星を物に例えずにその数からついた名も多数あります。平安朝の頃の和歌では「七つの星」、「七ます星」などの名で呼んでいます。この名はかなり広い範囲で言われていたようで、ナナツボシ、ナナツボシサマ、ナナボシなど少しずつ変形した形で広く全国に散らばっています。

これに対して、この七星を四と三に二分して、双六の賽の読み方にならってシソーボシ（四三星）やシソーノホシと呼ぶ言い方も古くから言われていたようで、幾つかの古文献で見ることができ、又、熊野那智大社の田楽舞の御田植の歌詞でも聞くことができます。

また、江戸の「物類呼称」には「東国にて七曜の星と称す」とあるそうで、内田武志氏の調査によれば、その使用は現在でも静岡以東であるそうです。このシチヨノホシ、またはヒチヨーノホシと言う名は中国で言う日、月、水星、火星、木星、金星、土星、つまり七曜の転じたものと解されていますが、内田氏は七星の方言のセショーから来たものではないかとその著書で述べておられます。

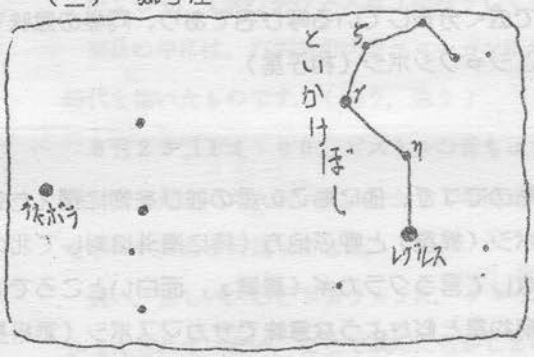
フナボシ（船星）やフナガタボシの名は、春から初夏にかけてのγ星からη星までの五星が船の形に見えることから付いた名で、γδが船尾とηが船首です。北斗を七つの星の並びでとらえない見方は珍しいものですが、天津船のイメージが実に素朴で気持ちのいい名であります。

α星、β星は北極星を探す目標となるので指極星と言いますが、静岡県の鰺ケ島ではアンナイボシと呼び、北極星を知る案内としていました。もっとも、ここではα星だけを指しているようです。

又、北斗を第七星を切っ先とする剣とみて、この星をケンサキホシ（剣先星）と呼ぶ地方もあります。。又、陰陽道ではこの星の指す方角に向いて戦えば必ず破れるとしたために、これをハグンノホシ（破軍の星）とも呼び、これが訛って、ハグリボシ、ハクウンセイなどとも言い、熊本隅府では一名をイクサボシと言うそうです。

ζ星の横に付いているアルコルは古代より知られていましたが、日本でも、ソエボシ（輔星）、やジュミョウボシ（寿命星）の名で知られていました。

（三）　獅子座



この星座の和名で、明確にどの星かと同定できる名は獅子の大鎌を指して言うトイカケボシ（樋掛け星）しか見あたりませんでした。これの他では、デネボラとその付近の三星と結んで菱形の四星と見るか、レグルスとη，γ，ζの四つを結んで菱形と見るかのどちらかは判りませんが、ともかくは獅子座のあたりの四星をミツヨノケンと呼ぶ名が採集されているようです。

（四）　烏座

ヨツボシ（四つ星）、ヨンボシ（四星）、ヨスマボシ（四隅星）

このように数で現したものが、烏座の四辺系つまりβδγεの４星を呼ぶ名としては多いようです。似たような呼称としてヨツバリ、ヨノ、シボシ、ヨスマサマ、ヨツボシサン、ヨボスサンなどが見られます。

これに対して、この四星を物に見立てた呼称も結構あり、多い例としてはウスの形に見立てた呼称で、臼みウスの方言の

ダイガラボシ（台碓星）、ウスツキボシ、ヤグラボシ（ヤグラはダイガラの方言）

等で、他にもホカケボシ（帆掛け星）やツクエボシ、ハカマボシ、マクラボシ。ずば抜けて変わった呼称としてはムジナの皮の四隅にクギをうち付けて壁に張り付けた形にみたカワハリ（皮張り）でしょう。

（五）　牛飼座

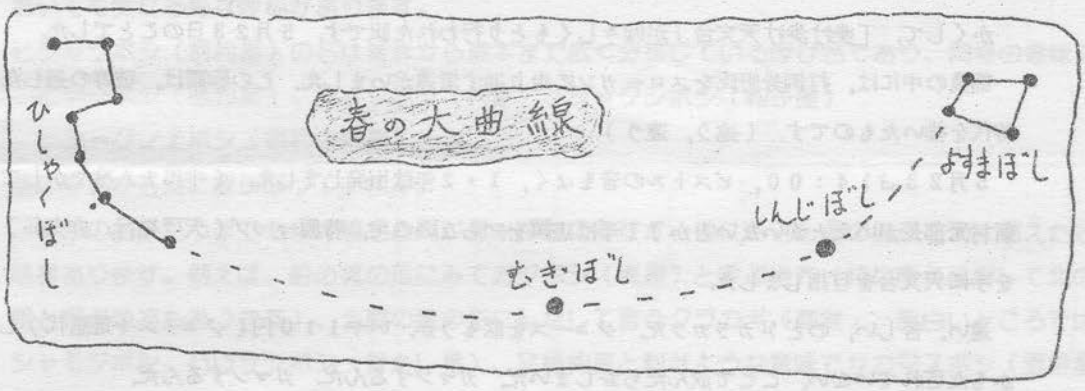
牛飼座の星と言えばやはり北斗に始まり、スピカに至る春の大曲線を描くα星アルクトゥールスでしょう。この星は晩春、麦の熟れる頃に昇るのでムギボシ（麦星）の名があります。麦星とは実に季節感に溢れた良い名でありますが、これの他にも五月ごろの季節感を漂わせる名が多く、サミダレボシ（五月雨星）やウオジマボシ（魚島星）の名も聞くことができます。尚、魚島とは魚の多い季節を指し、これを言う高砂ではタイの多い季節で五月に当たるそうです。

この他にも意味の不明なカジガイボシやその色から天狗（狗賓）の赤い顔を連想したグヒンボシ（

狗賓星）の名も採集されています。

（六）　乙女座

残念なことに乙女座でも前述の牛飼座同様、主星のスピカの名しか採集されていません。フクボシ（福星）とシンジボシがそれでどちらの名もその由来は定かではないのですが、フクボシは「これが西山に隠れる時刻まで夜業をすれば福が授かる」と言伝えられているそうです。また、シンジボシの名は更によく解らないのですが、野尻抱影氏も内田氏もこれを真珠星と解しているようです。



以上星の和名を紹介してきましたが、スペースの都合、予定していた夏の星までいくことが出来ませんでした。またそのうちに夏から冬の星やそれ以外の天体についても記してみたいと思います。

参考文献

「日本の星」野尻抱影著、中公文庫

「民族・民芸双書80、星の方言と民俗」内田武志著、岩崎美術社

「星三百六十五夜　上・下」野尻抱影著、中公文庫

歩け歩け天文台

甲斐　謙一

それは，５月１０日の事だった．

県立運動場では，熊大天文研究会恒例の新歓行事ソフトボール大会が行なわれていました．チームは，部長冨永氏の元に集結した１・２年生軍団ブルーインパルスと，その他上級生によって作られたヨーローインパルス（別名　カンオケズ），若さ対年の功の戦いとなったわけです．

このゲームにおいて最も大事なことは，１・２年が勝てば夕飯を驕（おご）ってもらえるということです．そのかわりに，負けたら，熊大から天文台まで２０.１Kmを歩き通さなければならなかったのです．どこからこんな発想が出てきたかというと，今をさること十数年前，昭和６１年に芳野氏（前部長）

が，「自分はまだ若い！」といいはってかは知りませんが，天文台まで歩き通したという事実にもとずいているのです．

おたがいに負けられないこの試合，結果はどうなったかというと，ＴＩＴＬＥから御想象がつかれるかと思いますが，そうです，１・２年が負けたんです．（因みに点数を申し上げると，１４対１５の大接戦でした．）

かくして，「歩け歩け天文台」が仰々しくもとり行われた訳です．５月２３日のことでした．

部員の中には，打倒芳野氏をスローガンに走り通す者達がいました．この物語は，彼等の過した時代を描いたものです．（違う，違う）

５月２３日１４：００，ピストルの音もふく，１・２年は出発しました．（中に１人冷やかして新村元部長がいたとかいないとか）１年は道順を知らないので，特製マップ（天研発行，非売品）を手に天文台を目指しました．

遠い．苦しい，のどがカラカラだ．ジュースを飲もうか．いや１１０円（ジュース＋電話代）しかもたされていない．ここで飲んだらおしまいだ．ガマンするんだ．ガマンするんだ．

どのくらい時間がたったのだろうか．やっと坂までたどりついた．この坂さえ登りきれば天文台だ！水が飲めるんだ．あと少しだ．あと少し．あと　少し．

１着中嶋（１年）２時間４分．２着甲斐（２年）２時間１３分．３着平瀬（２年）２時間３分．

あれ？あっ？君，遅刻してスタートしたのか．順位変更

１着平瀬（２年）２時間３分．２着中嶋（１年）２時間４分．３着甲斐（２年）２時間１３分．

この後続々と到着してきた．中にはビール５００ｍℓを飲みながら歩いたという不届者もいた．が，何はともあれ，死傷者が出らずによかった．みんな，おつかれ．

１年に天文台への道順を覚えさせるため，この罰ゲームは毎年行うことに決定された．また，上級生は，いかさまをしようとも絶対に勝つことを誓い合った．（某○井２年は朝６時３０分から毎日練習をしている．）現１年の諸君，来年はまだ２年生だ．ガンバッテ歩いてくれたまえ．

追伸　芳野前部長の名誉の為，記録は記載いたしませんでした．御了承下さい．

総会報告

岡　昭彦

５月１７日の日曜日，昭和６２年度熊本県民天文台定期総会が，参加者５３名で行なわれました．その時の事をお知らせします．

芳野浩之さんの司会で始まりました総会は，宮本幸男台長の挨拶，相良城南町教育長の挨拶と続き，議事に入りました．

☆ 議長選出／話術には定評のある艶島敬昭さんが選ばれ，名議長振りを発揮しました。

☆ 昭和６１年度業務報告（安達智子）／主な業務は，４月２４日の皆既月食とハレー彗星の観測会．この時は５００名近くがおしかけて天文台はパニックとなりました．それと，８月１３日からのＧＳ－１（あじさい）の観測，１１月のパソコン（ＰＣ９８０１ＶＸ２）購入などです．その他のことなど，去年の星屑を見てください．そして，安達さんが，来台者の統計をまとめてくれました．そのグラフを同封します．

☆ 昭和６１年度会計報告（永井剛）／同封の紙を見てください．収入の部では定期の利息がかなりあったようです．これで支出の部のパソコンをかなり補っています．他支出では，トイレの建て替え，スライディングルーフのハネ上げ扉の修理などがあります．天文台もそろそろ老朽化が目立ってきたようです．

☆ 昭和６１年度監査報告（立川則之）

☆ 会則改正／宮本台長より←会則第２章第１０条（２）“副台長２名以内”を“副台長若干名”とする改正案が出され全会一致で可決されました．

☆ 役員改選／台長に宮本幸男さんが全会一致で選出され　新台長によって副台長３名，常任理事５名，理事１０名が委嘱されました．名誉台長は城南町の上田長雄町長にお願いしました．

- 名誉台長　上田長雄（城南町町長）
- 台長　宮本幸男
- 副台長　小林寿郎　艶島敬昭　永井剛
- 常任理事　安達智子　立川正之　冨永昌人　長谷勇治　渡辺知史
- 理事　荒井賢三　小林昌樹　新村史明　高田祐一　永原博英　元島威　山本遵　吉田健二　芳野浩之　渡辺和宣
- 監査委員　立川則之　西村幸男　　敬称略，５０音順

☆ 昭和６２年度業務計画（冨永昌人）／年間行事計画を同封しています．星を楽しむ会は毎月第４土曜日に天文台で開かれ，そのつど，葉書か星屑でお知らせします．振るって御参加ください．それと６月７日に３１cm鏡を再メッキに出しましたので７月初旬頃まで３１cm望遠鏡は使えません．その間は１２.５cm双眼鏡などで見てもらいます．ハレー彗星記念誌は５名の編集委員によって編集作業中で，１０月には出る予定です．

☆ 昭和６２年度予算案（永井剛）／支出の大きなものはハレー彗星記念誌です．その他に天文台観測室への階段の改修予定です．１２.５cm双眼鏡は１０万５千円で購入しました．

これで議事は終了し閉会となりました．この後今年は，例年とは少し嗜好を変えて天文座談会を行ないました．ＮＴＴ彗星発見者の西川登さんと高森天文台の永井聰さんをお呼びして，宮本台長，彗星なら小林さん，司会役の艶島さんらを中心にいろんな話や質問が飛び交いました．西川さんは

日本天文学会の彗星発見者に贈られる表彰状とメダルを披露され，永井さんは自作する時の材料の探し方などを話されていました。まだまだ話は続きそうでしたが，時間となり，今年の総会も盛会のうちに終わりとなりました。

―天文座談会の様子　（永井氏撮影）―

お知らせ

☆　6月27日(土)　「星を楽しむ会」のお知らせ

大口径双眼鏡お広め会と称して12.5cm双眼鏡で星団などを観望します。

31cmはありませんが日頃目にする機会の少ない大口径双眼です。

熊本県民天文台機関紙「星屑」　1987年5月号　通巻150号

発行所　熊本県民天文台　〒861－42　熊本県下益城郡城南町藤山

TEL　0964－28－6060

熊本県民天文台事務局　〒860　熊本市古京町3番2号　熊本博物館内

TEL　096－324－3500

振替口座　熊本8－24463　熊本県民天文台事務局

編集担当　福岡昭彦（今回を最後にしたいとおもう）